とある科学の電磁侵犯（ハッキングパルス）

バラランシャ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある科学の電磁侵犯（ハッキングパルス）

【Ｎコード】
Ｎ０７８２Ｚ

【作者名】
バラランシャ

【あらすじ】
ある１人の青年が居ました。
青年は性格が少し捻くれていて、いつもパソコンからあらゆる情報を見ていました。
ある時はアメリカの某航空宇宙局の極秘データを覗き、またある時はロシア政府の極秘文書を公に曝したりした。

だが、彼にとってはそのどれもが単なる暇潰しだった。

しかし、彼の人生は1人の少女と出会い、大きな分岐路に直面した。

この物語は、そんな青年と少女が出会いから始まります。

設定（主人公・天壌寺学園・電磁侵犯：微ネタバレ）（前書き）

※１２／３：容姿・服装・能力詳細を追記
※１２／６：学園詳細微修正

設定（主人公・天壌寺学園・電磁侵犯：微ネタバレ）

名前：振屋　一光

読み：ふるや　かずみち

身長：１７２ｃｍ

体重：６８ｋｇ

髪型：ほぼ黒だが先端だけ白の短髪。

瞳色：灰色。

容姿：一般の男子高校生の平均的な体格。

服装：上はチェック柄のものを好んできており、下は大抵Ｇパン。

性格：人を嘲ったり不幸にするのが好き。

所属：学園都市第７学区・天壌寺学園高等部（２年生）

職業：高校生

住居：天壌寺学園学生寮３０１号室

レベル：大能力者（レベル４）

能力：電磁侵犯（ハッキングパルス）

備考：現在、自身の都合により天壌寺学園を休学中

●天壌寺学園の詳細

第7学区に存在する学校で、小中高大のエスカレーター式の学校。

入学する為の最低条件が能力の発現である為、在学している生徒は全員能力者。

低能力者(レベル1)～大能力者(レベル4)は在籍しているが、超能力者(レベル5)は在籍していない。

大能力者(レベル4)も一光を含めて１２人しか存在しない。

また、この学園では能力測定を月に1度は行っており、生徒たちの能力の微々たる変化も記録し、さらにその成長度により能力開発の時間割り(カリキュラム)の内容を変更したり、重点的にしたりと学園側が計画を組んでくれる。

それにより、元々低能力者(レベル1)だった能力者が強能力者(レベル3)や大能力者(レベル4)にまで成長した実績もある。

因みに、大覇星祭では常盤台中学、長点上機学園に続く成績を残すが、上位2校が注目を集めているためにあまり注目されない。

●能力：電磁侵犯（ハッキングパルス）の詳細

振屋一光の能力である電磁侵犯（ハッキングパルス）は、自身の放つ特殊な電磁波で様々な端末に入り込み、端末の中にあるデータや映像を覗き見たり、システムを弄って誤作動させたりすることができる。

データや映像を覗き見る場合、自身の脳内で映像化することができ、さらに端末に表示したい場合は映像化した電波を対象の端末に流すことで表示することが可能。

ハッキングする際には別に端末に触れる必要はなく、最長で１０ｍ離れた位置の端末からもハッキングすることが可能で、端末の中に誰かの連絡先が登録されていると、その端末から登録者の端末へのハッキングが可能。

また、この能力の真骨頂は人と接触した際に発動することで、接触した人物の記憶を覗くことができる事と、自身に対してブーストを掛けることができる事の２つ。

記憶を覗くことができる理由としては、『とある科学の超電磁砲』で御坂美琴と木山春生の間に起きた現象と同様。電気を介して回線を繋ぐことで、相手の記憶に強制リンクするため。

この能力は自身にも使用することができるため、もし自身が忘れていても能力を介して記憶の根底から探し出すことができる。

また自己ブーストに関したは、同時に任意で痛覚を遮断することができる為、動かなくなった四肢を能力によって発した電気信号で誤認させることで、無理矢理動かすことが可能。

だが、それをした場合、能力を解いた時の反動は大きく、最悪の場合は死ぬ可能性もある為、自己ブーストは最大でも２０分、痛覚遮断と併用で１０分までしか使用できない。

因みに一光の発する電磁波は電撃使い（エレクトロマスター）の中では特異なもので、例え超能力者（レベル５）第３位である『超電磁砲』御坂美琴であろうとも感知・察知することは至難。

プロローグ：青年と少女（前書き）

はい、完全に見切り発車な上、他にも執筆しなければならない小説があるにも関わらずに新しく書いてしまった。

タイトルも適当に付けたので後で変更するかもですし。

・・・・どうしようもないですね、俺（汗

とは言っても、他の連載中小説の執筆に今現在気が乗らない為、暇潰し程度に更新していこうと思います。

なので不定期更新ではありますが、それでも良い方はお読みください。

それでは、『プロローグ：青年と少女』をご覧ください。

プロローグ：青年と少女

「――――――っと、これでいいか、初春？」

学園都市、風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部。

ここでは今、１人の青年がＰＣ画面から視線を外し、その視線を後ろにいる頭に花をいくつも飾っている少女――初春飾利へ向ける。

「あ、はい！　ありがとうございました、振屋（ふるや）先輩！」

青年――振屋（ふるや）　一光（かずみち）は初春に気にするなと一言言うと、椅子から立ち上がる。

すると初春はすぐに一光の座っていた椅子に座り、ＰＣに向かうと作業を開始した。

しかし作業を始めてすぐに、初春は一光に感嘆の声を漏らす。

「凄い、私が調べても分からなかった情報がこんなに・・・・」

それを聞いた一光は、何を言うでもなく初春の頭を軽く撫でる。

初春は一瞬照れるが、直ぐに作業へと戻る。

「じゃあ俺は帰るわ。なんかあったらまた呼んでくれ」

そう言いながら、一光は初春の頭を撫でていた手を頭から離す。

と、初春があっ・・・と声を漏らすが、何事もなかったようにすぐに作業に戻る。

その様子を見た一光は、軽く溜息を吐くと初春の耳元で小さく囁く。

「今日はオムライス作って待ってるからな。ちゃんと仕事しろよ、飾利」

「――――――～～ッ！？／／／／／　こ、ここではちゃんと苗字で呼び合うって！！／／／／／」

不意打ちだったのか、初春は顔を真っ赤にして一光をポカポカと叩くが、それもすぐにやめＰＣに向き直る。

まぁこの場合はそっぽを向いたと言っても過言ではないのだが・・・・

その様子を見て苦笑する一光は、それじゃあ頑張れよと一言告げて、一七七支部を後にした。

一光と初春、２人は今ではとても仲が良いが、その出会いはちょっと良いものとは言えなかった。

この物語は、そんな２人の、振屋一光と初春飾利の、微妙な出会いから始まります。

次回――電侵魔術師（ハッキング・ウィザード）

第1話：電侵魔術師（ハッキング・ウィザード）

薄暗い部屋の中、響くのはキーボードの入力音とマウスのクリック音のみ。

「うわ、イタリア政府の奴ら、こんな情報隠してたのかよ。マジないわぁ・・・・・・どっかのマスコミにでもリークしておくか」

そんな中、ＰＣディスプレイの明かりに照らされていた青年の顔が嘲る様な笑いを見せるが、直ぐに無表情な顔になる。

「・・・・・はぁ、これで大抵の国家政府には潜り込んだし・・・・どうするかなぁ」

青年は部屋のカーテンを開き、窓を開けて外の空気と太陽光を部屋に入れる。

「・・・いっそのこと、学園都市の企業組織を相手にでもして色々探ってみるか？」

そう呟いた青年の表情は、やはり無表情だった。

「電侵魔術師（ハッキング・ウィザード）、ですか？」

場所は変わり、ここは風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部。

「えぇ、そうですの。どうやらその方は学園都市の様々な研究所のデータをハッキングしているらしいんですの」

現在、ツインテールの少女――白井黒子は、パソコンに向かって作業をしている花飾りの少女――初春飾利と今話題になっている事件の容疑者について話していた。

「私も呼び名だけは聞いたことはありますけど、本当にその人なんですか？」

――――――電侵魔術師（ハッキング・ウィザード）。

学園都市に広まっている都市伝説の中で一番信憑性の高い都市伝説。

どんな組織のどんなセキュリティでも掻い潜り、重要データや極秘情報を盗み出し、マスコミにそのデータを流す。

そしてそのハッキングされたＰＣには、そんな形跡が全く残されていない。

そのことから、様々な推測がネット上に飛び交っている。

高位の電撃使い（エレクトロマスター）ではないのかとか、部屋には国１つが買えるほどのスパコンが置かれているとか、信憑性の高いものから低いものまで

様々だ。

「全く形跡を残さないのが電侵魔術師（ハッキング・ウィザード）なんですよ？　それなのに何故」

「えぇ。確かにハッキングされた形跡はありませんでしたわ。ですが、だからこそ、その方しかいらっしゃらないんですの」

白井の言葉を聞いた初春は、頭の上に？を浮かべる。

そんな初春を気にすることなく、白井はその理由を話し始める。

「先程言ったように、確かに殆ど形跡はありませんでした。ですが、とある研究所では何故か極秘の情報がマスコミにリークされていました」

それを聞いた初春は、少し納得した。

が、それでも腑に落ちない部分があった。

「でも、それだけで判断するには時期尚早ではないですか？」

「確かにそうかもしれません。ですが、こんなものを残されては誰でもその方がやったとしか思いませんわ」

そう言いながら、白井は自身の端末を操作してあるものを初春に見せる。

そこには『あんたらの極秘情報はちゃんとマスコミにリークしといたからありがたく思ってくれ。まぁその頃にはあんたらは警備員（アンチスキル）に捕まってるかもしれないけどな。それじゃあ、精々逃げ回れよ。電侵魔術師（ハッキング・ウィザード）』と書かれたメモデータが表示されていた。

「これは・・・・・・」

「マスコミには伏せていますが、この方がこの件に関与しているのは明白。私たちはこの方がどなたなのかを突き止め、話を聞く必要がありますの。私はその辺りに詳しい方に話を聞いてきますので初春はネットなどで情報を集めてください」

「はい！　分かりました！」

初春の返事を聞いた白井は、空間移動（テレポート）で直ぐに聞き込みに向かった。

「よし、私も頑張りますよ！」

などと意気込んだ初春だったが、結局その日は2人とも目ぼしい情報を見つけられずに帰路に着く。

「おい嬢ちゃん。どうしてくれんだ、えぇ？」

「や、やめてください！」

翌日、初春は放課後になるとすぐに一七七支部へと向かっていた。が、その途中でスキルアウトの男とぶつかってしまい、今現在絡まれている。

「さぁて、どう落とし前つけてもらおうかぁ？」

厳つい男3人に囲まれてしまい、初春は怖くて体を強張らせた。

「おぃ、あんたら何やってんだ？」

と、そんな状況の中、誰かが3人の男に声を掛ける。

声を掛けられた方に視線を向けると、そこには紺と黒のチェック柄のTシャツとGパン、先端だけが薄ら白い髪で灰色の瞳の青年が立っていた。

「あぁ？　てめぇには関係ねぇよ！　どっか行け！！」

そんな青年の登場を邪魔に思った3人は凄みながら青年を睨みつける。

しかし初春はここぞとばかりに助けてくれと言う視線をその青年に向ける。

・・・・が、そんな視線を青年はあっさり裏切った。

「あ～・・・それもそうっすね。んじゃ、俺はこの辺で」

「「「「・・・・・・え？」」」」

初春はともかく、男たちも信じられないものを見る様な瞳で青年を見る。

普通なら、「その娘を離せ！」などと言うセリフを吐く場面だが、彼はそんな期待を裏切りその場を立ち去ろうとする。

男たちは疑問に思いながらも自分たちの中で自己完結し、その視線を初春へと戻す。

それに気づいた初春は、呪い殺すような涙目で青年を睨みつける。

直後、初春はその青年の身体の周囲にパチッと電気が迸るのが見えた。

今のは何だったのかと思ったが、現在は目の前の状況を何とかしないため、そちらに思考を戻そうとする。

その時だった。男たち3人のケータイが同時に鳴り出した。

何事かと思い、3人はすぐにケータイに出る。

刹那、電話口の向こう側から離れていても分かるほどの怒声が響いてくる。

『ちょっと恭也！　私以外に何人も付き合ってる女がいるってホントなの！？』

「ま、眞子ちゃん！？　そ、そんな事あるわけ――――――――――――」

『じゃあこの写真は何よ！！』

その言葉と同時にその男のケータイにメールが届く。

それを開き、内容を確認した男は驚愕した。

そのメールには、男を中心に何人もの女性が彼を囲むように写っていた。

・・・・・・・・全員が全裸で。

「こ、これは――――――――――――」

『もう良いわよ！　あんたがこんなやつだと思わなかったわ！！
別れてやるんだから！！』

そう怒鳴りつけると同時に通話が終了。
男はこんなことしてる場合じゃねぇと叫びながらダッシュで彼女の元へと向かっていった。

『康夫！　あんた何してんの！！　私はあんたをそんな子に育てた覚えはないわよ！！』

「か、母ちゃん！？　一体何の話――――――――――――――」

突然の母親からの電話に驚き、理由を聞こうとした男だったが、直後に届いたメールを見てその理由を理解した。

『あんたがそんな子だったなんて知らなかったわ！！　もう私たちはあなたと親子の縁を切るからね！！　金輪際家に帰ってこないで！！！！』

「ちょ、母ちゃん！？　ま、待って！　話を聞いてくれって！！」

そのメールには、男が女の子と情事を行っている写真が添付されていた。

・・・・そう、女性ではなく女の子なのだ。

見た目や服装、持ち物を見て判断すると、その添付写真に写っている女の子は・・・・・小学生らしい。

男はすぐにその場を駆け出し、親の元へと向かい出した。

『和明！　お前最高だな！　まさかネットで自分の痴態曝すなんて！！』

「はっ？　何言って――――――――――――」

さっきの男同様、この男も理由を聞こうとした直後にメールが届く。

男は恐る恐るメールを開くと、そこには男が複数の男性に全裸で攻められている姿が写っていた。

それを見た瞬間、男の顔からさぁっと血の気が引いていき、男はケータイの通話を切るとすぐに自宅へと戻る。

そして、その場に残されたのは――――――――

「・・・・え、えっと・・・・結局、助かったんですか？」

――――――――――――――――――――状況が上手く呑み込めていない初春だけだった。

「まぁ、それは大変でしたわね」

「本当ですよ！　もうあんな思いはしたくありません」

風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部。

初春は今、先程の出来事を白井に愚痴りながら電侵魔術師（ハッキング・ウィザード）について

の情報を探している。

「それにしても、声を掛けておいて助けもしないなんて、その殿方は何がしたかったのでしょうか？」

「知りませんよ！　もうあんな人の事、思い出したくもありません」

自身のピンチに声を掛けたが結局は何もせずに立ち去った青年のことを思い出し、初春はプンスカ怒り出す。

しかし、その青年の話を聞いた白井は、何かが引っ掛かったのか考え込む。

「・・・・初春。その殿方が立ち去ろうとした時、電気が見えたと仰っていましたが」

「あ、はい。見間違いかもしれませんが、御坂さんの出すようなものに似てたので」

それを聞き、白井は少し思案すると端末を弄り出す。

白井は何かの書類に次々と目を通していく。と、その動作がピタリと止まる。

「初春、あなたが見た男性はこの方ではなくて？」

そう言いながら白井の端末に表示された書類に視線を向ける初春。
直後、彼女の目が見開かれ、あー！！　と言う声が響き渡る。

「そうです！　この人です！！　・・・・ってあれ？　なんで白井さんがこの人の書類を？」

端末に表示されていたのは、確かに初春が見た青年だった。
が、何故白井は都合良く彼の書類を持っていたのか、それが分からなかった。

「実はこの書類、警備員（アンチスキル）から頂いた電侵魔術師（ハッキング・ウィザード）と思わしき人物の書類なんですの」

「えぇ！？　そうなんですか！？」

「とは言っても、能力からピックアップしただけのリストのようですけど、今回はそれが当たったようですわね」

「ですが、どうして彼だと？」

「その殿方が去った直後にスキルアウト達に連絡が入ったと言うことは、その方が声を掛ける以前に彼らの写った写真を彼らの端末かパソコン、もしくは知り合いの端末やらから探し出し、さらにはメ

ールを送信、またはネットに公開した。つまり彼は、その短時間でこれらのことができたと言う訳です。そんな事、件の電侵魔術師（ハッキング・ウィザード）の様な人物しかできませんわ」

白井の推理を聞き、初春はなるほどと感嘆した。

だが、それと同時に疑問も浮かんだ。

「だったらなんで私を見捨てたんでしょうか？」

「さぁ？　それは本人に聞いた方が早いのでは？」

そう言うと白井はどこかに連絡を入れる。

暫く何かを話してから通話を切る。

「今その殿方をこちらに連れてくるよう手配いたしましたわ。話はその方が来てからにいたしましょう」

「は、はい！」

そう返事をした初春は、白井の端末のデータをＰＣの方に転送してもらい、ディスプレイに表示する。

そこには青年の書庫（バンク）に登録されているデータが表示されている。

名前：振屋一光

年齢：１７歳

性別：男

所属：学園都市第７学区・天壌寺学園高等部（２年生）

職業：高校生

住居：天壌寺学園学生寮３０１号室

レベル：大能力者（レベル４）

能力：電磁侵犯（ハッキングパルス）

備考：現在、自身の都合により天壌寺学園を休学中。

１度目の出会いでは自身を見捨ててその場を去った人物として、２度目の再会では複数の研究所へのハッキングに関しての重要参考人として。

初春飾利の中での彼の印象は悪いものになっている。

そんな状態で、少女――初春飾利と青年――振屋一光の物語は紡がれていく。

次回――電磁侵犯（ハッキングパルス）

第2話：電磁侵犯（ハッキングパルス）1

第7学区・天壌寺学園学生寮３０１号室。

「うおぅ・・・この企業、こんな危ないこと考えてんのかよ。マスコミにリークすんの決定だな。後ついでにいつものようにあのメモを残してっと。これで終了！」

振屋一光は薄暗い部屋の中、ＰＣ画面に表示されている『ＣＯＭＰＬＥＴＥ』という文字を満足げに見つめている。

そして椅子から立ち上がると窓際まで行き、カーテンをバッと一気に開き、窓を開け放つ。

「ん～！　一仕事した後に空気を入れ替えると気分が良いな」

そんな事を呟きながら空を見上げていると、突然一光の端末が鳴り始めた。

一光はすぐに端末を手に取ると、何をするでもなく目を瞑った。

そのまま少しすると、軽い笑みを浮かべながら瞳を見開いた。

「ほう、風紀委員（ジャッジメント）が俺に気付いたか」

そう呟いた一光は、開け放った窓に身を乗り出すと、そのまま一気に飛び降りた。

「振屋一光がいない？　それは本当ですの？」

現在、風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部では白井黒子と初春飾利は振屋一光の住む学生寮に向かった風紀委員（ジャッジメント）から振屋一光の不在の連絡を受けた。

「そうですか・・・・申し訳ありませんがそのまま振屋一光の捜索をお願いいたします。はい、では」

「どうしましょうか、白井さん？」

端末の通話を切った白井に問う初春。

白井は少し思案するが、直ぐに初春に指示を出す。

「私も振屋の捜索に出ます。初春は第7学区内の監視カメラで振屋の捜索をお願いいたします」

「分かりました！」

それと同時に、白井は空間移動（テレポート）で支部から出ていき、初春はPCで幾つもの第7学区内の監視カメラを表示、次々に確認していく。

そして、初春はある1つの監視カメラに一光の姿が映っているのを見つける。

「白井さん！　見つけました！　第7学区のセブンスミスト4階の監視カメラに映ってました！」

『分かりましたわ。今すぐそちらに向かいます！　初春はそのまま振屋の姿を監視カメラで追ってください！』

「はい！！」

白井の指示に従い、初春はセブンスミスト内全ての監視カメラを画面全体に表示し、一光の姿を追いかける。

場所は変わり、こちらは第7学区内のとあるファミレス『オリャ・ポドリーダ』。

「さて、今頃は俺が偽装した監視映像を見た風紀委員（ジャッジメント）がセブンスミストに行ってる頃か。まさか本物はこんなところで堂々と飯食ってるとは思わんだろうな」

一光は注文したパエリアを食べながら、自身の端末にパチパチと軽い電撃を放っている。

「とまぁ、そんなこと言っても直で見つかったら終わりなんだがなぁ。と言っても、この店は寮からはかなり離れてるからなぁ。少しの間は大丈夫だろうが、そろそろ出た方が良いか」

そう言いながらパエリアを完食した一光は、ふぅと息を吐くと、メニューの方に視線を向けると、少し考え込む。

そして――――――

「あ、すみません。チュロス５つください！」

――――――――――この店での待機を選択した。

そして場所はさらに変わり、こちらはセブンスミスト・３階。

丁度そこに、白井がエスカレーターでやって来た。

「初春、今私はセブンスミストの３階まで来ました！　振屋は今何階にいますの？」

『今は５階のエレベーター前の自動販売機で飲み物を買って休んでいるみたいです！』

「分かりました。初春はそのまま彼を見張っていてください！」

白井は端末から聞こえた初春のはい！と言う返事を聞き、直ぐにエスカレーターを駆け上がり、４階、そして５階へとやって来た。

そのまま客の邪魔にならないよう、小走り程度で移動し、目的の場所へと着く。

「・・・？　初春、振屋はどこに行ったんですの？」

しかし、そこには目的の人物は居らず、全くの無人だった。

だが、初春からの返答は白井を混乱させるものだった。

『え？　何言ってるんですか？　白井さんの後ろのベンチに座ってるじゃないですか！？』

「なんですって？」

そう言われ、後ろに振り向く白井。

が、そこにはやはり誰も居なかった。

「・・・やはりここにはいませんわ」

『えぇ！？　でも、監視カメラの映像ではそこに――――――って、えぇ！？』

と、突然端末の向こう側の初春が驚きの声を上げた。

白井はどうしたんですの！？と少し声を荒げながら問いかける。

『ふ、振屋一光が・・・・セブンスミストの監視カメラ以外にいくつも映ってます！　それも同時に！』

「何ですって！？」

「ぐふぅ・・・・流石にチュロス5本は食べ過ぎか」

一光は腹を擦りながら、外の景色を眺める。

「さてと、奴らもそろそろ俺の偽装に気付くだろうな。まぁ既に別学区に出たから関係無いがな」

一光は今、学園都市内を走る巡回バスに乗っており、次の停車は第6学区のアミューズメント施設の前。

「ふはは、そこに入れば――――――――――――」

一光は自身の端末に表示されたＭＡＰを見て、不気味な笑みを浮かべる。

それと同時に表示されていたのは――――――――――――

「――――――――――――俺の、独壇場だ」

――――――――――――施設すべてのセキュリティ作動時のシミュレート結果だった。

・・・・・・・・・次回へ続く

第3話：電磁侵犯（ハッキングパルス）2

「初春、振屋の居所は分かりましたの？」

『すみません！　監視カメラの映像は振屋の能力でいろんな場所に姿が写っていて判別できません！』

現在、白井は初春に言われた情報通りに行動しているが、どこもかしこも映像に姿はあれど、現場には姿が無いと言う状態が続いている。

「所詮は能力で作り出した映像。きっとどこかに綻びがある筈ですわ。初春はそれを何とか見つけ出してください！　私は聞き込みで彼の行方を捜します！」

『わ、分かりました！』

白井は初春との通信を終え、聞き込みへと向かおうとする。

「あれ？　黒子じゃない。あんたこんなところで何してんのよ？」

と、そこで突如背後から声を掛けられる。

この声は黒子が最も良く聞くことのある声で、自分の尊敬して止まない人物のものだとすぐに分かった。

「お姉さま！！」

そう言って飛びつこうとする白井だが、その少女が白井に向け電撃を放ってきた為、できなかった。

「はぁ、あんたも懲りないわね。で、何してんのよ？」

白井は服装を整えながら立ち上がると、少女の問いに答える。

「いたた。風紀委員（ジャッジメント）の仕事である人を探していますの」

そう言いながら、白井は少女に端末に表示した振屋の顔写真を見せる。

「ふ～ん・・・あれ？　この人だったらさっき学園都市巡回バスに乗ってるのを見たわよ？」

「そ、それは本当ですの！？」

少女は白井の問いにえぇと一言だけ答える。
それを聞き、白井はすぐに初春に通信する。

「初春！　聞いていましたわね！」

『はい！　さっきバス会社に連絡を・・・・あっ！　来ました！
運転手の話では第６学区のアミューズメント施設前で降りたようです！』

「分かりました！　私はそちらに向かいます！　初春はその後の足取りを追ってください！」

端末の向こう側からはい！と言う初春の返事を聞いて、白井はすぐにその場所へと向かう。

「それではお姉さま！　私はこれで！」

「あ！　ちょっと黒子！？」

白井は少女に別れを告げ、第６学区へと向かっていく。

「全く、なんだったのよ」

少女は白井が居なくなった後、そんな事を呟いてから少し考え込むと、うんと頷きその場を後にした。

『どうやらそのアミューズメント施設に入っていったようです』

「分かりました。初春はそのまま情報を集めていて下さい」

そう言って初春との通信を終える白井は、目の前のアミューズメント施設に入っていく。

中に入ると、まだ営業中の筈の施設には全く客の気配がなく、もぬけの殻だった。

「誰も・・・いない・・・？」

疑問に思った白井は、警戒しながらも足を進めて店内の奥の方へと進んでいく。

周囲にはアミューズメント施設の為、最新のゲーム機の筐体が所狭しと設置してあり、結構死角が多いので、白井はその点にも注意し

ながら進んでいく。

と、そんな時、突如ガチッと言う音が響いたかと思うと、前方に設置してあるストライクアウトゲームの筐体から、野球ボールが複数高速で発射される。

「――――――っ！？」

白井は咄嗟に空間移動（テレポート）で発射されたボールを回避する。

だが、さらにモグラたたきの筐体からモグラが射出され、白井を襲う。

「何なんですの！？」

白井は悪態吐きながらも、もう一度空間移動（テレポート）で避ける。

そこで、端末から初春の声が聞こえてくる。

『白井さん！　気を付けてください！　その施設の筐体のいくつかには対侵入者用のトラップが仕掛けられています！』

「なるほど、そう言う事ですの」

初春の情報を聞き、白井は先程の出来事に納得する。
だがそこで疑問も生まれた。
何故、風紀委員(ジャッジメント)の自分が侵入者になっているのか。
だが、その疑問もすぐに解ける。
「・・・・なるほど、これも振屋の能力と言う事ですのね」
そう理解した直後、右前方の筐体の画面に青年の姿が映し出される。
『ご明察だ、風紀委員(ジャッジメント)の少女』
「あなた、振屋一光ですわね？」
そう、そこに映し出されたのは白井の追っている人物、振屋一光だった。
『確かに、俺は振屋一光で合ってる。序でに言うと、今巷で噂の電(ハッ)侵魔術師(キング・ウィザード)でもある』
「あら、そんなにあっさり認めてしまってもよろしかったのですか？」

『何、どうせもうそろそろバレる頃だろうとは思っていたさ』

そう言いながら肩を竦める一光。

『さて、ここまで来てもらったんだ。ちょっとしたゲームをしないか？』

「ゲーム、ですの？」

嘲る様な笑顔を見せながら言い放った一光に、白井は眉をひそめる。

『そう、ゲームだ。俺はこの施設の最上階に居る。君はそこまで無事に辿り着き、俺の元まで辿り着くことができれば君の勝ちだ。その時は素直に捕まろう』

「それ以外は私の負け、と言う事でしょうか？」

『ふはは。その辺は君の解釈に任せるよ。それじゃあゲーム――――――』

刹那、白井の背後の筐体から2体の警備ロボが飛び出してきた。

『――――――――――スタートだ』

「くっ！？」

「さて、彼女はここまで辿り着くことができるだろうか？」

一光は最上階に設置してあるベンチに寝ころびながら、白井の状況を施設内の監視カメラの映像で逐一チェックしていく。

「おぉ、流石は空間移動（テレポーター）能力者なだけはある。次々にセキュリティーを回避して上階に上がってきてるか」

端末には、白井が警備ロボからの攻撃を回避しながら空間移動（テレポート）で上階に移動している姿が表示されていた。

「だがまぁ、アレだ。そろそろその厄介な能力を封じさせてもらおうか」

直後、一光は端末に表示された『ＳＴＡＲＴ』ボタンを押した。

「さて、これで――――――――――っ！？」

一光が白井に対策を講じた時、彼の表情が突如驚愕のものに変わる。

「ま、待てよ。なんでこいつがここにいるんだ！」

「はぁ、はぁ・・・やっと半分まで来ましたの」

現在、白井は施設の7階にまでやってきていた。

流石の白井も、次々に襲いくるセキュリティーに着実に体力を削られていっている。

そしてこの階も例外は無かった。

――――――――――スドォン！！

「――――――――――っ！！　ぐぅ！？」

突如白井の身体に右側から衝撃が走り、左側の壁まで吹っ飛ばされ

る。

何事かと視線を衝撃のした方へ向けると、相撲取り型の警備ロボが突っ張りをした状態で突っ立っていた。

白井は壁に手を着きながら立ち上がり、警備ロボのさらに後方へ視線を向ける。

そこにはゲームの筐体があり、上にデカデカと『最新腕相撲ゲーム！』と表記されていた。

「くっ、油断しましたの。ですがもう――――――――」

当たりませんと言おうとした白井だったが、突然壁に着いていた手に何かを填められた感覚に気付き、そちらを見る。

すると、いつの間にか手首に自身の持っているものと同型のＥＳＰ錠が填められていた。

「なっ！？　しまっ――――――――――――」

刹那、先程の相撲取り型警備ロボが白井の懐に飛び込み、鳩尾に強烈な突っ張りを撃ち放つ。

「――――――――――――がはっ！！」

白井は衝撃と共に、クレーンゲームの筐体に叩きつけられる。
同時に、クレーンゲームの筐体のガラスが開き、中のクレーンが白井に巻き付き動きを封じる。

「くっ！（ここまで、ですの！？）」

相撲取り型警備ロボが白井に近付き、止めの一撃を放とうとした。
だが、その一撃は白井に届く前に――――――――

「全く・・・何やられそうになってんのよ、黒子！」

――――――――少女から放たれた強力な電撃により跡形もなく消された。

「何でだ！　何であの・・・・超能力者(レベル5)第3位、『超電磁砲(レールガン)』御坂美琴がいるんだ！！」

一光は、端末の映像に映っている少女――御坂美琴を憎々しげに睨む。

「くそっ！　どうする！？　今からじゃ逃げられないかもしれないし・・・・・・」

端末の映像を見ながら、一光はその場で考え込む。

「・・・・・仕方ない。あれだけはやりたくなかったんだがな」

一光はどこか諦めたような、吹っ切れたような表情で笑い出す。

「ふはは！　もう、どうにでもなれだ！　こうなったらなんだってやってやるさ！！　さぁ、早くここまで来い！　超電磁砲（レールガン）、御坂美琴ぉ！！」

次回――ＶＳ超電磁砲（レールガン）

第４話：ＶＳ超電磁砲（レールガン）

「ふ～ん。それで、そいつを倒せばいいのね？」

現在、御坂美琴は白井から今回の件について詳しいことを聞いていた。

「い、いえ、別に倒さずとも捕まえることができれば」

御坂の言葉に白井は訂正するが、彼女はそんな言葉を聞き入れなかった。

「だって、どうせ相手は抵抗するんでしょ？　だったら倒した方が早いじゃない」

「いえ、そうかもしれませんが・・・」

あーだこーだと若干論争気味の２人。

だが、そんな２人の状況は、突如響き渡った男の声によって変わる。

「たくよぉ・・・・なんでテメェがここに居んだよ、超電磁砲（レールガン）」

その声に2人は同時に振り返ると、一光が頭を掻きながら階段を下りてきているところだった。

「あら、屋上で待っているのではなかったのですか？」

「あぁ？　あぁ、そんなんそいつが来たら意味ねぇだろ。そいつご自慢の超電磁砲（レールガン）で1発ＫＯじゃねぇか」

「そうね。じゃああんた、諦めて捕まる気になったっての？」

御坂の言葉を聞いた振屋は、軽く笑う。

「ふはは、ここまで来てそれは無いってことは分かってるだろ？何、上から逃げるにはここを通る必要があるだけなんだよ。だから――――――――」

刹那、御坂が消飛ばしたものと同タイプの警備ロボが数体飛び出し、襲い掛かった。

「――――――――強引に通らせてもらうさ！」

振屋の命令で警備ロボが御坂に接近し、突っ張りが御坂に直撃しかける。

「――――――あんた、嘗めてんの？」

だが、突っ張りが届く直前に御坂の放った強力な電撃により、全ての警備ロボが吹っ飛ばされる。

「こんな警備ロボぐらいじゃ、私は止められないわよ」

吹っ飛ばされた警備ロボは全てバチバチと音を立てており、内部からは煙も出てきていた。

それを見た一光は、先程見せた様な笑みを浮かべる。

「・・・・・ふはは、そんなわけないだろ？　俺だってアンタと同系統の能力なんだ。それぐらい分かるっての」

「同系統・・・・・あれ？」

それを聞いた御坂は、一光の顔を見ながら頭に疑問符を浮かべる。

「・・・・アンタ、どっかであったこと無い？」

それを聞いた一光の表情がさっきまでのへらへらしたものから、からり機嫌の悪い険しいものへと一変した。

「・・・ふは、ふはは、ふはははははは！　てめぇ、マジで言ってんならぶち殺すぞ」

一光はそう言い放つと、今まで握っていた携帯端末を握り潰した。

それにより、一光の掌から床へと赤い血が滴り落ちていく。

「な、なによ？」

「・・・・・・・・・ふはは、まぁ良いさ。警備ロボがダメってことは他のセキュリティーもダメだろうし、ここはイッチョ俺自身が戦って退かせるか」

一光は指をポキポキ鳴らしながら、ゆっくり御坂へと近付いていく。

それを見て、御坂は白井を階下へ下るための階段のある入口付近まで移動する様に言う。

白井も、今の自分では足手まといになると分かっているため、御坂に従い移動する。

「出来るもんならやってみなさい！！」

白井が移動したのを確認すると、御坂は怒鳴りながら強力な電撃を放つ。

御坂の放った電撃は普通の電撃使い（エレクトロマスター）でさえ気絶するほどのもので、一光も直撃すれば一溜りもない程だった。

が、その電撃は一光に直撃することは無かった。

「そんな電撃、当たんねぇよ！」

一光は向かいくる電撃を走って回避する。

だが、その速度が尋常じゃなかった。

地面を一蹴りしただけで、既に御坂との距離を半分近く縮めていた。

「なっ！？」

「遅ぇよ！！」

そして、次に地面を蹴る事により、一気に御坂の懐へと入り込んだ

一光は、彼女の腹部へと掌底を撃ち込む。

「がっ！！」

「っりゃあぁ！！」

勢いよく掌底を振り抜き、御坂を壁まで吹っ飛ばす。

壁に打ち付けられた御坂は、唸りながらゆっくりと立ち上がる。

「ぐっ・・・（ヤバいわね。肋骨が2，3本ヒビ入ってるっぽいわね）」

「まだまだいくぜぇ！！」

腹部を抑えながら立ち上がった御坂を見て、一光はさらに殴りかかる。

「っ！　そう簡単にやられないわよ！！」

だが、御坂は咄嗟に電撃を一光へと放つ。

咄嗟に放った一撃だった為、一光も一瞬反応が遅れてしまう。

「（流石にこれは避けれないでしょ！）」

御坂もこの攻撃は直撃すると思っていたのだが、そこでありえないことが起きた。

一光が放たれた電撃全てを一瞬のうちに目視で確認すると、瞬時に身を翻した。

それにより、放たれた電撃は一光に直撃することなく彼の後方の筐体に直撃した。

「っ！？　そんな――――――」

「油断大敵だおらぁ！！」

「――――――がはっ！？」

今の一撃を回避されて驚いた御坂の隙を、一光は見逃さなかった。

一光は驚いていた御坂の脇に、強烈な回し蹴りを叩き込む。

強烈な蹴りを受けた御坂は、先程同様に壁まで吹っ飛ばされてしまう。

「かはっ！　ぐぅ！！（何なのよ、あの動き！？　デタラメじゃない！！）」

「ふはは、どうしたよ御坂美琴。前戦った時とは立場が逆だなぁ！」

ゆっくりと御坂に近寄る一光の姿を、御坂は何とか立ち上がって見据える。

同時に、一光の今の言葉で、御坂の中にあった彼についてのことを思い出す。

「ぐっ！　そう言えば、あんた・・・前に私に挑んできた異能力者（レベル2）、じゃない」

「ふはは！　今頃思い出したか。だがちょっと訂正してもらおうか。今の俺は異能力者（レベル2）じゃない。大能力者（レベル4）だ！！」

「へぇ・・・レベル上がったのね」

「あぁ、さすがにあんなやられ方したらなぁ。だが結局、俺の能力はこんな応用をしない限り、戦闘では役に立たないんだよ」

それを聞き、御坂は疑問を浮かべる。

「アンタも・・・私と同系統の能力なら、電撃ぐらい放てるでしょ？　しかもレベルは４なんだし」

「・・・・あぁ、普通ならそうさ。だが、俺が放てる電撃は相手が少し痺れるぐらい。それ以上は頑張ってもダメだった！」

一光の言葉を、御坂は黙って聞き続ける。

「だから俺はそっちに能力を使わず、別のことで何とかできないかと考えた！　結果がこの、ハッキングに特化した能力さ！！　俺のレベルは、それによって設定されてるんだよ！！　普通に戦ったら強能力者（レベル3）にも勝てねぇよ・・・・」

一光は俯き、力強く握る。その掌から、止まりかけていた血が再び滴る。

「だから俺は、どうしたらいいか考えたさ。どうすればまともに戦えるか。その答えが今の状態だ」

「・・・あんた、一体なにしたってのよ？」

「ふはは、簡単なことさ。俺の能力を使って運動神経に入り込み、一時的にブーストを掛けてるだけさ。同時に身体のリミッターも外してるから、いつもの数倍の身体能力になってるはずさ」

それを聞いた御坂は信じられないと言う表情になる。

「アンタ！　そんなことしたら身体が持たないわよ！！」

「そんな事、こっちが一番分かってんだよ！　だけどなぁ、あんた

に勝つ為なら俺は・・・何だってやるんだよぉ！！」

怒鳴ると同時に一光は一気に御坂目掛け駆けだす。

が、直後、一光の右脇に突如衝撃が奔った。

「ぐぉ！！　何っ！？」

視線を衝撃のした方へと向けると、警備ロボの腕部が脇に直撃していた。

「もう一発！！」

そう声を上げながら、御坂が能力を使用して警備ロボのパーツを一光へ向け勢いよく放つ。

それを見た一光はすぐにバックステップで回避しようとするが、少し間に合わずに右腕に直撃する。

すると、一光の右腕がボキンッ！と音を立ててあらぬ方向へ折れてしまう。

「ガアアアアアアアアッ！！！」

腕が骨折した痛みに、一光はその場に蹲る。
見ると、折れた腕から先がだらんとしていて動く気配がなく、どうやら骨折により腕の腱まで切断してしまったようだ。

「がぁ、ぐぅ！！」

「どうする？　まだ続ける気？　見たところ腕の腱も切ったみたいだし、早いとこ病院に行った方が良いんじゃないの？」

御坂の問いに、一光は痛みに耐えながら立ち上がり、傍に落ちていた警備ロボのパーツを使い、応急のギプスとして使用した。
そして御坂を睨みながら、左拳を強く握る。

「ぐっ・・・まだ、続けるに・・・決まってんだろぉ！！」

一光は左拳を構えながら、御坂へ向かっていく。
それを見た御坂は先程と同じように警備ロボのパーツで攻撃しようとする。
だがその攻撃は、一光の両腕で上手く逸らされてしまう。

「な！？　何で右腕が！？」

そう、今一光は右腕も使用して御坂の攻撃を避けている。

信じられない光景に御坂は一瞬戸惑うが、直ぐ目の前にまで来ていた一光に気付き、思考を目の前の事に戻す。

「らぁ！！」

一光が左足でハイキックを放ち、それを御坂はしゃがみこむことで回避する。

「あぶなっ！？」

「もういっちょぉ！！」

が直後、ハイキックが外れた反動を使い、一光は右足で回し蹴りを繰り出す。

御坂は紙一重の所で回し蹴りを避け、同時に周囲に散らばっていた細かい金属部品を一光へ掃射する。

「チィ！」

一光は寸でのところで回避したものの、彼の身体は限界が近いのか悲鳴を上げ始めていた。

「っ！？　あんた！　体が！！」

見ると一光の身体はあちこちから出血しており、さらに腕の肉は数ヶ所裂けていた。

「ふ、ふはは・・・まだまだだ。まだ俺はやれる！！」

「アンタ！　そんな状態でやれる訳ないわよ！！　それに今も体中が痛いんじゃ！？　それに何で右腕が！？」

「ふは、さっき言ったよな？　俺は能力で運動神経にブーストを掛けてるって。それと同じで、痛覚神経を遮断してんだよ。だから痛みは感じない。右腕も腱は切れたが、俺の能力で直接神経に働きかければ、動かすことが可能だ」

一光の説明を聞き、御坂はここで一光を止めないと危ないと、そう思った。

「・・・・悪いけど、そんな話を聞いたら何が何でもあんたを止めるわよ」

「ふはは！　できるもんならやってみな！！」

お互いに決着をつけるため、その場を駆けだす2人。

一光は自身の身体の限界までブーストを掛けた拳で、御坂は電撃を纏った拳で、同時に相手に向け突き出す。

直後、その場を御坂の電撃の輝きで満ち、真白に染め上げていった。

・・・・・そして、大能力者（レベル4）『電磁侵犯（ハッキングパルス）』振屋一光と、超能力者（レベル5）『超電磁砲（レールガン）』御坂美琴の戦いは、幕を閉じた。

次回――病院と天壌寺学園

第5話：病院と天壌寺学園

「・・・・・・・・・知らない天井だな」

一光が目を覚まして発した最初の言葉だった。

一光は上体を起こし、周囲を確認する。

周囲には特に何もなく、あるのは周囲を仕切る黄色基調のカーテンと、自身の腕に付いている点滴ぐらいであった。

それだけで、ここが病院だと言うのを認識するのは容易かった。

「・・・・・そうか」

そこで一光は思い出す。

あの時、御坂と全力でぶつかり合ったはずの自分が、目を覚ませば病院にいる。

つまり――――――

「――――――――――俺、負けたんだな」

その事実に気付き、一光は両目を腕で隠すと、微かに涙を流す。

「・・・・・・俺、これからどうなるんだろうな」

暫くして、やっと気持ちも落ち着いてきた一光は、今の自分の状況が不味いと言うことを思い出す。

分かっているのだけでも『電子計算機損壊等業務妨害罪』『個人情報保護法違反』『器物損壊罪』等が思い浮かぶ一光。

が、そんな事を考えても仕方ないか、と思った一光は考えるのをやめる。

「ま、なる様になるか」

そう呟いた時、丁度病室のドアが開く音がする。

少しすると、誰かが一光のベッド付近にまで来ると、仕切っていたカーテンをバッと開く。

「あら、もう目を覚ましていらしたんですの」

そこに居たのは、初めに一光を捕まえようと施設に入ってきた風紀委員（ジャッジメント）、白井黒子だった。

「・・・・あぁ」

「そうですの。では、貴方のこれからの処分を仰っても構いませんの？」

それを聞いた一光は来たかと小さく呟いた。

白井は一光のベッドの脇までやって来ると、そこに置いてある椅子に座る。

「では、まずあなたのこれからの処遇についてですの」

「あぁ、俺はどうなるんだ？」

書類を持った白井に一光は処遇を聞く。

だが、書類を見ていた白井の表情が微妙なものへとなっていた。

どうしたんだと思った一光だが、白井は諦めたかのように処遇を告げる。

「えっと・・・・今度行われる特別講習の受講ですの」

「・・・・・・ん？　他には？」

「・・・・ありませんの」

白井の言葉に、一光は珍しく唖然の表情になる。

「いや、無いわけないだろ。俺、色々と罪を犯してるぞ？」

「えぇ、それは重々承知です。ですが、上の決定は先程仰ったものだけですの」

「・・・・そいつら、頭悪いんじゃないか？」

「それは言わないでほしいですわ」

そう言うと白井は深く溜息を吐く。

と、そこで一光は思い出したことがあった。

「そう言えば、超電磁砲（レールガン）はどうしたんだ？　流石に何ともないってことは無いだろ？」

一光に聞かれ、白井はお姉さまならとその問いに答える。

「処置を済ませ、今は常盤台の寮へ戻っているはずですわ」

「そうか・・・・・伝言頼んでいいか？」

白井は何ですの？と言い、一光の言葉を聞く。

「すまなかった、ねぇ」

場所は変わり、常盤台中学女子寮。

御坂は白井から聞いた一光の言葉を怪訝な表情で聞いていた。

「何か企んでんじゃないでしょうね？　あいつ」

「それは無いかと。本人もかなり反省しているようでしたわ」

「ふ～ん・・・・まぁ良いわ。そう言えば、あいつの学校の方には連絡は入ってんでしょ？　あいつ、どうなるのよ？」

御坂に言われ、白井は複雑な表情になった。

その表情を見てさらに疑問になった御坂は、白井に問い詰めるとさらっと答えた。

「それが・・・・・ちょっとおかしな状況になってまして」

「おかしな状況、ってなによ？」

「いえ、実は・・・今回の事件のことを全て学園の教師に連絡したところ――――――――」

「――――――――――は？　退学しなくていい？」

現在、一光の病室に天壌寺学園の自身の能力開発担当教師がやってきて、学園での処遇を告げに来ていた。

「あぁ、そうだ」

「いやいや、おかしいだろ！？　俺が今回何やってたか知ってるだ

ろ！？」

「確かに、お前が何をやったか、全てを聞いた。だが、それなら尚更、お前を退学させるわけがない！」

「いやいやいやいや！？　おかしいだろ！？」

教師の言う意味不明なことに、一光は珍しく困惑する。

「そうでもないだろ。お前は今回、超能力者（レベル5）の超電磁砲（レールガン）と戦ったんだろ？」

「そうだけど、それが今何の関係が？」

「聞いた話だと、お前は能力で身体能力のリミッターを解除した上に、さらにブーストを掛けたそうだな」

「・・・・・はい」

「それが危険なことだってのは分かってるな？」

「・・・・・・・・はい」

それを聞いた教師は、軽く息を吐くと、真剣な表情で一光を見る。

「なら、その能力の限界を理解しておかないといけないだろ。だか

ら、学園に来てちゃんと限界を測れ。そうすれば、その能力はもっと便利に使えるようになるかもしれないだろ」

「――――――ッ！？」

教師の言葉を聞いて、一光は驚愕した。

犯罪を犯した自身を蔑むことなく、逆に心配してくれてい多のだから。

「だから、な。学園に来い」

教師の言葉に、一光は涙を流しながらはい、と呟いた。

「まさか、退学にしないで復学を進めるなんて、どんな学校よ」

「全くですわ」

御坂と白井は、一光の病室の前で先程の会話の内容を全て聞いていた。

「聞いた話によりますと、どうやら天壌寺学園は、生徒の能力の開発や研究に特に力を入れているらしいですわね。それにより、今まで１１人もの生徒が低能力者（レベル1）や異能力者（レベル2）から大能力者（レベル4）へとなったようです」

彼で１２人目だそうですがと白井が付け加えると、御坂はへぇと感嘆の声を漏らす。

「まぁ、最近ではその能力開発も進展がなく、それで自棄になって学園を休学していたようですが」

「そう・・・」

御坂には、彼のその時の気持ちが少なからず分かる。

低能力者（レベル1）から超能力者（レベル5）にまで上り詰めた彼女だからこそ、一光の気持ちが分かるのだ。

「ま、あいつももう大丈夫でしょ。流石にこれ以上悪いことはしないと思うし」

「でしょうね。では帰りましょうか」

御坂はそうねと言うと、２人は病室に入ることなく、帰っていった。

彼と彼女の出会いの事件が幕を閉じたが、２人の関わりは全く無い。

２人が関わり合うのは、次の事件でのことだった。

これにて、第一章・・・電磁侵犯編――完

次回、第二章・・・虚空爆破事件編――幻想殺し（イマジンブレイカー）

第5話：病院と天壌寺学園（後書き）

＝後書きと言う名の駄弁り場＝

てなわけで、第一章終了！　え？　早い？　知ったこっちゃねぇ！

（爆

いや、まぁ第一章はプロローグ的な面もあるんで、これぐらいでいいかなと。

次回からは『とある科学の超電磁砲』の原作から虚空爆破事件へ入ります。

原作と微妙に変化する部分もありますので、ご了承ください。

では皆様、第一章の拝読、ありがとうございました。

次回第二章もお読みいただければありがたいです。

※因みに後書きは、各章の最終話にのみ載せる予定です。

設定：2章開始時（主人公&オリキャラ：随時追加&微ネタバ

※この設定は微妙に変化することがあります。

設定：２章開始時（主人公＆ａｍｐ；オリキャラ：随時追加＆ａｍｐ；微ネタバ

○天壌寺学園

●振屋　一光

読み：ふるや　かずみち

身長：１７２ｃｍ

体重：６８ｋｇ

髪型：ほぼ黒だが先端だけ白の短髪。

瞳色：灰色。

容姿：一般の男子高校生の平均的な体格。

服装：上はチェック柄のものを好んできており、下は大抵Ｇパン。

性格：以前とは変わり、多少は友好的になった・・・と思われる。

所属：学園都市第７学区・天壌寺学園高等部（２年生）

職業：高校生

住居：天壌寺学園学生寮３０１号室

レベル：大能力者（レベル４）

能力：電磁侵犯（ハッキングパルス）→能力詳細は第一章の設定へ

●春夏秋冬　廻

読み：ひととせ　めぐる

身長：１７６ｃｍ

体重：７１ｋｇ

髪型：薄く赤みがかった茶髪の天パ。

容姿：顔は微イケメンで、体格は良い方。

服装：大抵が学園の制服。もしくは学園のジャージ。

性格：とても友好的だが、努力しない奴や下心のある奴には嫌悪感を抱く。

所属：学園都市第7学区・天壌寺学園高等部（2年生）兼風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部

職業：高校生兼風紀委員（ジャッジメント）

住居：天壌寺学園学生寮３０２号室

レベル：大能力者（レベル4）

能力：虹色炎舞（セブンブレイズ）

七色の炎を操る能力で、色によって特性が存在する。

赫炎：水で消そうとしても消すことができず、かなりの高熱の炎。
桃炎：物体の比重を形状を変化させずに軽量化する。４０～５０℃前後の炎。
橙炎：対象は自分限定だが、１度だけ心停止した時に蘇生することが可能。体感温度は無し。
黄炎：発火させた箇所の細胞を活性化させ、自然治癒力の向上を促す。体温と同等の温度の炎。
翠炎：小型の炎弾を射出する。７０～９０℃程度の炎。
静炎：超能力者の能力の弱体化。体感温度無し。
紫炎：遠距離からの狙撃用の炎。１２０～１５０℃前後の炎。

第6話：幻想殺し（イマジンブレイカー）

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・・」

『・・・・限界だな。そこまでだ！』

天壌寺学園、能力開発試験アリーナ。

現在ここで、能力者同士の模擬戦闘が行われていた。

「おおぅ・・・・お前がここまで戦えるとは思わなかったぞ、振屋」

そう言いながら、模擬戦を行っていた生徒がもう一人の方へと近付き、手を差し出す。

「ふはは、そりゃどうも。けど結局はそっちの勝ちじゃねぇか。なぁ、四季くんよ」

一光は差し出された手を掴み、立ち上がる。

四季と呼ばれた生徒は、複雑な表情になっていた。

「いや、確かに四季だけどな。正確な名前は春夏秋冬(ひととせ)な。春夏秋冬(ひととせ)廻(めぐる)」

生徒――春夏秋冬(ひととせ)　廻(めぐる)は、苦笑しながら一光と肩を組む。

「まぁアレだ。お前もだいぶいい顔になったな」

「そうか？　よくわかんねぇけどな」

「何つーか、スッキリしたって感じの顔になってんぞ？」

廻に言われ、一光はあ～とこの前のことを思い出しながら声を漏らす。

「・・・まぁ、色々あったからな」

「ま、良いけどな。俺も良い感じの模擬戦相手ができて嬉しいしな」

「いや、俺のこの能力はそう何度も使えるもんじゃないからな？」

「分かってるって。流石に日に何度も頼まないっての」

一光はならいいけどと言うと、担当教師の居る場所へと向かう。

「んじゃ、俺は先生んとこ行ってくるから」

「おぅ！　帰りになんか食い行こうぜ！」

「ふはは、良いな！　じゃあまた後でな」

そう言うと、２人はアリーナ入り口で別れた。

少し歩いたところにあるそれぞれのデータ収集室へとやって来た。

中に入ると、一光の元に直ぐに担当教師がやって来た。

「振屋！　お前凄いじゃないか！　最初は数分だけが限界だったのが、今では身体にも耐性が大分付いて２０分にまで伸ばしたんだからな！」

「いえ、先生の指導があったからです」

「何言ってんだ！　お前の努力があればこその結果だ！　お前はもう少し誇っても良いんだぞ！！」

担当教師に褒められ、少し照れくさくなったのか視線を逸らしながらありがとうございますと呟いた。

「今日はもう疲れただろ？　帰って休んでいいぞ」

「はい、ありがとうございました！」

一光は一礼すると、部屋を出て昇降口へと向かう。

「ん～！　んでさ、どこ行くよ？」

廻と一光は道を歩きながら、これからどこに行くかを話している。

「俺的にあそこが良いと思うんだよ、第１５学区に最近できたフランス料理のファミレス！」

「俺は断然、オリャ・ポドリーダだな」

「お前、何時もそこだろ？　たまには別の店にも行こうぜ！」

「ふはは、何を言ってますやら。あそこ以外に良い店なんてある訳がない」

お互いに言いたいことを言っていると、同時に表情が固まる。

「・・・・・・」

「・・・・・・・」

「「やんのかコラ！！」」

それから数分、２人は言いたいことを言い合い、結果・・・・

「ふはは、Ｗｉｎ！！」

「くそ、口喧嘩じゃ勝てる自信がねぇ・・・・」

結局、一光の何時も良くファミレス――オリャ・ポドリーダに決定した。

「てなわけでレッツゴー・・・・と行きたいが、その前に金下ろしてくるわ」

「リョーカイ、そこのコンビニで下してこい」

一光は分かったと言うと、言われたコンビニへと入っていく。

直後、ＡＴＭコーナーから不幸だぁー！と悲痛な叫びが響いてくる。

見ると、そこでは一光とそう歳も変わらない青年が、ＡＴＭの画面に表示されたキャンセルボタンを連打していた。

「くそぅ！　カードが出てこねぇ！！　これはホントに不幸だぁ！！」

「・・・・あの、ちょっと良いっすか」

一光が声を掛けると、青年が振り向く。

青年は涙目になっており、その顔は本当に幸薄そうな顔だった。

「大きなお世話だ！！」

地の文に突っ込まないでください。

「？？　どうかしたんですか？」

「あ、いや、えっと・・・カードが飲み込まれてしまって」

一光はふ～んと言いながらＡＴＭへと近付き、軽く触れる。

直後、ＡＴＭの画面にノイズが奔り、同時に飲み込まれていたカードが排出される。

「お、おおおぉぉぉぉぉ！！　カードが出てきたぁ！！」

「ほい、これでいいか？」

「いや、ホントありがとうございます！」

青年は一光に礼を告げると、直ぐにコンビニを出て行った。

一光は何だったんだろうと思いながらも、ＡＴＭからお金を下ろして外で待っている廻の元へと向かう。

「ふはははは・・・・・チュロス7本は食い過ぎだろうか？」

「当たり前だ、バカ」

食事を終えた一光と廻は、寮へ戻るために河川敷沿いの道を歩いている。

「しかしアレだな。こうしてお前と帰るのもなんだかんだで久しぶりじゃねぇか？」

「ふはは、そう言えばそうだな。俺が休学する前きりだから、大体3か月ぶりか？」

「あ～、そう言えばお前、あの時ネガティブってたもんな」

「・・・・・言うな、思い出したくない」

一光ははぁと溜息を吐きながら、河川敷を眺めている。

と、少し離れた位置で何かがバチッと輝くのが目に入った。

「おぃ、今の見たか？」

「おう。行ってみるか？」

一光が頷くと、2人は輝きが見えた場所まで走り出す。

少しすると、目的の場所へ辿り着く2人。

そこで2人が見たのは、超能力者（レベル5）の第3位、『超電磁砲（レールガン）』御坂美琴が誰かと戦っているところだった。

すると、一光は御坂と戦っている相手を見て、驚いた。

「あり？　あいつ、さっきコンビニにいた奴？」

「コンビニ？　あぁ、お前が言ってたカードが飲み込まれてたって奴か」

２人は離れた位置から御坂と青年の戦いを眺めている。

そんな中、２人は可笑しなことに気付く。

「なぁ、さっきからあいつが右手で防ぐと、能力が消されてないか？」

「あぁ、俺もそんな感じがする。電撃に対して耐性でもあるんだろうか？　どう思うよ」

廻の問いに、一光は首を横に振る。

「いや、それだとさっきの砂鉄の攻撃を防いだ理由が分からない。何か根本的に、能力自体を打ち消してるような」

そう言っていると、御坂が青年の手を握り、直接電撃を流そうとしていた。

「流石にこれは終わったか？」

「だろうなぁ・・・・って、あり？」

だが、手を握ってから御坂が能力を発動する気配がない。

それどころか、青年が拳を振り上げるとビクッと身体を震わせた。

「どういう事だよ・・・あれ・・・・」

「ふはは、面白いな。もしかしてあの右手に触れてると、能力自体発動できなくなるのか？」

怯えた御坂を見かねた青年が、ゆらゆらとその場に倒れ込み、棒読みでマ、マイリマシターと言った。

一瞬、呆気に取られていた御坂だったが、直ぐに怒りで電撃を放つと、それに驚いて逃げ出した青年を追い始めた。

「・・・・・何だったんだろうな？」

「さぁな。だけど、あの能力についてちょっとした話は聞いたことはある」

都市伝説程度だけどなと付け加える一光に、廻はどんな能力なんだと問う。

「どんな能力でも、触れることで打ち消す能力。それが俺の聞いた話の能力だ。確か名前は・・・『幻想殺し(イマジンブレイカー)』だったか？」

「どんな能力でも、か・・・・本当にいたら、てか実際に見たか、今」

「まぁ、あれがそうだと決まった訳じゃないけどな」

「だなぁ。そろそろ帰るか」

廻に言われ、一光は時間を確認すると既に結構時間が経っていたことに気付く。

2人はすぐにその場を駆け出し、学生寮へと戻っていった。

次回――虚空爆破(グラビトン)事件・始まり

第7話：虚空爆破（グラビトン）事件・始まり

「虚空爆破（グラビトン）事件・・・ってあぁ、最近話題になってる事件か」

天壌寺学園２－Ａ教室内で、一光は昼食を取りながら、廻と今話題の虚空爆破（グラビトン）事件について話していた。

「そそ。この前寄ったコンビニあるだろ？　あそこで事件があったみたいなんだよ」

「あ～、あそこか。だけどそれがどうした・・・ってあぁ、そうか。そう言えばお前、風紀委員（ジャッジメント）だっけ」

「おま、忘れんなよ」

廻は購買で買った菓子パンの袋を開け、食べ始める。

「そんでよ、どうも犯人の狙いが分からんわけよ。んで、お前の知恵を貸してくれ」

そう言いながら廻は、その事件の資料を渡してきた。

一光ははぁ、と溜息を吐きながら、決定しているであろう返答を思い浮かべながら、廻に質問する。

「拒否権は？」

「無いに決まってんだろ」

「ですよね～・・・・・はぁ、無いわぁ」

放課後、一光は1人で寮へと戻っていた。

その道すがら、廻に渡された資料を確認している。

「ん～、能力はアルミを基点に重力子を爆発的に加速させることで爆発させるのか。だが書庫(バンク)に登録されている該当の能力者は1人だけで、そいつにはアリバイがあると。分かってることは、ぬいぐるみにアルミを仕込んでいるってことぐらいか。別に決まった場所に仕掛けてるわけじゃないしなぁ・・・・ん？　これって・・・」

資料を捲っていた一光は、あるページを見て手を止める。

「・・・・これは偶然・・・・じゃあないわな。だが、まだ確信がな

い。

次に事件が発生した時にも同じような結果だった場合、この予測で決定か」

呟きながら一光は資料を閉じる。

空を見上げ、だけどと言いながら資料の表紙を撫でる。

「俺の予測は、当たらない方が良い」

一光は資料を鞄に仕舞うと、寮への帰路へ着く。

場所は変わり、こちらはとあるスーパーマーケット。

ここには今、客や店員は1人もおらず、風紀委員(ジャッジメント)である春夏秋冬(ひととせ)廻(めぐる)1人だけだった。

「こっのり～ん、この辺でいいのか？」

『えぇ、その辺よ。あとこのりんはやめて』

「分かりました、みいにゃん」

『戻ってきたら殴るわよ』

「すいませんでした」

彼の所属している風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部は、このスーパーで重力子の爆発的加速を観測した為、客や店員を全員避難させ終わったところだ。

現在は爆発物と思わしきも危険物を探していた。

「しっかし、どこにも見当たらないっすよ。もう誰かが処分したんじゃないっすか？」

『それは無いわ。今も店内で重力子の加速が観測されてる。時間的にもうすぐだから、気を付けるのよ』

「大丈夫だって。みいにゃんも知ってるっしょ？　俺の能力、『虹色炎舞（ブンブレイズ）』の効力」

『知ってるからこそよ。全く・・・・あ、あとみいにゃんはやめてって言ってるでしょ。殴るわよ』

「はいはい、分っかり――――――――――――」

刹那、店内に轟音が響き渡り、

廻諸共店内を爆風が襲い、真紅の炎が飲み込んでいく。

『ちょっと！？　廻、大丈夫なの！？』

店内に微かに聞こえてくる人の声。

先程まで、廻と通信していた女性――固法美偉が、廻の安否を確認する為に端末の向こうから叫んでいる声だった。

「痛ぅ～。大丈夫って言ったろ？　俺の能力『虹色炎舞（セブンブレイズ）』の１つ、静炎で炎の鎮静化をしたからな。ダメージは爆風で吹っ飛ばされたことぐらいだ」

固法は廻からの返答にホッとする。

だが直後、２人の予想だにしなかった事態が起きた。

――――――――――――ブン！

「『――――――――っ！？』」

固法の方はパソコンで新たな重力子の爆発的加速を観測し、廻の方

は目の前に落ちていたぬいぐるみの複数が同時に拉げていくのを見て、不味いと思った。

『廻！　今すぐそこを――――』

「分かってるっての！！」

固法に言われるよりも先に、廻はその場を駆け出して店外へと向かう。

だが、それよりも先に拉げたぬいぐるみたちが爆発し、廻を容赦なく襲った。

「廻が重体！？」

一光がそのことを聞いたのは、翌日登校してきて担当教師に偶然会

った時だった。

「あぁ、どうやら最近よくニュースなんかでやっている連続虚空爆破(トン)事件の現場で、爆発に巻き込まれたらしい」

それを聞いた一光は、自身の予想が当たっていたことを確信する。

同時に、何故外れてくれなかったのかと言う罪悪感にも似た感情を抱いた。

「昨日運び込まれてからはずっと手術中で、今朝方処置を終えたそうだ」

「そうですか・・・・教えていただき、ありがとうございました」

教師は気にするなと一言告げると、教員室へと向かっていった。

一光はそれを見届けると、自身の教室へと向かって歩き出す。

そして、彼はあることを決意する。

「犯人はぜってぇぶっ飛ばす！！」

そう決意した一光は、教室の自身の席へと座ると、カバンからノー

トＰＣを取り出し、あるプログラムを作り始めた。

次回――虚空爆破（グラビトン）事件・観測

第８話：虚空爆破（グラビトン）事件・観測

「俺の技術じゃこれまでが限界か」

一光は自身のノートパソコンに表示されたたった今組んだばかりのあるプログラムを見ながら呟く。

画面にはＰＣを中心とした半径１ｋｍ以内の地図が表示されている。

「あとは、この範囲内で重力子の急激な加速が起これば、観測できるはずだ」

一光はノートＰＣを閉じ、時間を確認する。

現在の時間は午前８時２１分。

もうすぐＳＨＲが始まる時間だ。

「・・・・犯人捜すのは放課後だな」

時は過ぎ、放課後。

一光は現在、第7学区内を歩きながら、重力子の爆発的加速を観測するのを待っている。

「ん～、この辺には居ないみたいだな。次の場所に行くか」

一光は周囲の学生たちに目を配ると、彼らの右二の腕を確認してある物を付けているかを確認する。

この場の周囲に付けている人物はいないため、一光はその場から動き出す。

「ん～、次はどこに――――――」

行こうかと言おうとした一光だが、不意に後ろから服を引っ張られる。

振り向くと、そこには小学生くらいの少女が一光の服を摘まんで立っていた。

「えっと・・・どうした？」

「あ、あの・・・・おようふく買いたいの」

「あ～・・・どこに行けばいいか分からないのか？」

一光の言葉に、少女はこくりと頷く。

はぁ、と溜息を吐きながら、一光は少女の目線と同じ高さまでしゃがみ込む。

「分かった。兄ちゃんが連れてってやるよ」

そう告げながら、一光は少女の頭を優しく撫でる。

少女はありがとうと照れながら呟くように言う。

「それじゃあ行くか！」

少女は元気よくうん！と返事をすると、一光に手を引かれながらついて行く。

セブンスミスト前までやって来た一光と少女。
しかしその直後、一光のＰＣが鳴り出す。

「っ！？　まさかこの近くで！？」

「どうかしたの？」

一光と一緒に居る少女が尋ねてくる。
どうしたものかと考える一光だが、そこに誰かが声を掛けてきた。

「あの、どうかしたんですか？」

一光は声のした方に視線を向けると、先日コンビニで出会った青年が立っていた。

「あれ？　あんたこの間の・・・・」

「あぁ、カードが飲まれてた奴か。俺は振屋一光、どうかしたか？」

「俺は上条当麻。いや、振屋さんが何か困ってるみたいだったから、気になって」

「あ～、俺のことは一光でいい・・・実はな」

一光は少女と出会ってからの事を説明する。

それを聞いた当麻は、だったら自分が連れて行くと言い出した。

「ん～、そっちが良いって言うなら頼むよ」

「おう、任せとけ！　それじゃあ行くか」

少女はこくんと頷くと、一光の方を向きバイバイと言いながら手を振る。

それに応えるように一光は少女に向け手を振ると、少女は満足そうな笑顔を一光に向け、当麻について行く。

２人の姿が見えなくなると、一光はすぐさまＰＣを開き確認する。

画面に表示された地図上に、１箇所だけ赤い点が表示されていた。

そして、その赤い点が表示されている箇所を確認して、驚く。

「っ！！　セブンスミスト内かよ！？」

だが、現在観測されているのはまだ微弱で、通常の衛星では観測されるほどのものではない。

だから、今現在この場で爆破が起こるかもしれないと知っているのは一光だけだ。

「チッ！　今はこの中にいるかもしれない風紀委員（ジャッジメント）を探すか！」

一光の推測、それはこの事件で狙われているのが風紀委員（ジャッジメント）の人間ではないかと言う事だ。

廻からもらった資料に目を通した時、一光は全ての件で風紀委員（ジャッジメント）が必ず怪我を負っていることに気付いた。

しかし、それが本当かどうかは分からない為、次に事件が発生するのを待ち、そして廻が被害に遭った。

一光は廻に自身の推測を教えていればと後悔したと同時に、自身の推測が当たっていたと確信した。

今日、一光は第7学区中を歩き回り、風紀委員（ジャッジメント）の人間を見つけると30分程見張って、何事もなければ別の人を探しては見張るということを何度か繰り返していた。

そして今、偶然にも重力子の爆発的加速の予兆と言えるものを一光は観測した。

少しすると、風紀委員（ジャッジメント）でも観測できるほどのものになるだろう。

「くそ！　1階ずつ虱潰しに行くしかないか！」

一光は悪態付きながらも、その場を駆けだした。

次回――虚空爆破（グラビトン）事件・再会と爆破

第9話：虚空爆破（グラビトン）事件・再会と爆破

「この階もいないか・・・・・そろそろ時間的に不味いんだが」

一光はＰＣのディスプレイに表示された時間と現在の重力子の状況を確認して焦る。

ここまで見てきた階には、風紀委員（ジャッジメント）らしき人物はいなかった。

「早く探さないと――――――」

そう言いながら、上階へと向かおうとした時だった。

突如、店内放送がセブンスミスト全体に響き渡る。

『誠に申し訳ありません。現在電気系統のトラブルが発生しました為、お客様は一時的店外へ退店していただきますようお願いします』

「――――――このタイミングで電気トラブル・・・・まさか！！」

一光がＰＣ画面に視線を戻すと、先程とは比べ物にならないほどの重力子の爆発的加速を観測していた。

直後、周囲の客たちがゆっくりだが一斉に出口へと向かい、歩き始めた。

一光は他の客にばれないように、こっそりと人の少ない場所へと移動する。

そして、周囲を見渡してネット接続用のモジュラージャックを見つけると、そこへ近付いて能力を発動する。

「まずはセブンスミストの内部構造のデータを抽出。その後、内部構造データを観測プログラムに組み込み、より詳細な重力子の加速観測箇所の割り出しだな」

呟きながら、一光は観測プログラムにセブンスミストの内部構造データを目にも止まらぬ速さで打ち込んでいく。

「・・・・・・よし、内部構造データの組み込み完了。次は詳細な観測地点の割り出し」

一光がプログラムに色々と打ち込み、最後にＥｎｔｅｒを押す。

すると、画面にセブンスミストのＣＧ画像が表示され、ある一点だけが光っていた。

「っ！？　丁度この上かよ！！」

それを確認した直後、一光はパソコンを鞄に仕舞い、その場を駆けだしていた。

上階へやって来た一光は、直ぐにパソコンを取り出して観測箇所を確認する。

と、そこであることに気付く。

「おいおい・・・観測箇所が動いてるだと？」

重力子の加速を観測している光点が、少しずつではあるがゆっくりと動いていた。

「・・・・まさか、誰かが持っているのか！？」

一光はパソコンを持ったまま、観測箇所へと駆けだす。
そして、観測箇所付近へと差し掛かった時、彼女たちは居た。

「ん？　あぁ！！　あなたは！！」

「ちょっとあんた、こんなところで何してんのよ？」

「一光か！」

そこに居たのは、一光が以前助けた？少女――初春飾利と、常盤台中学の『超電磁砲（レールガン）』こと御坂美琴。

そしてセブンスミストに入る前に名乗り合った青年――上条当麻だった。

「お前ら、どうしてここに？」

「それは「こっちのセリフです！　どうして貴方がここに居るんですか！！」えっと、初春さん？　私のセリフを取らないで・・・・って、聞いてないか」

初春はこの間の事もあり、一光のことをあまりよく思っていない為、結構きつく当たる。

その様子を見た御坂は、そんな彼女を見て苦笑を浮かべていた。

「いや、ちょっとな。それより当麻、あの子はどうした？」

「そうだった！　あの子がまだ出てきてないから探してたんだ！一体どこに！？」

当麻が慌てて探しに行こうとした時だった。

一光にガミガミと文句を言っていた初春のケータイに着信が入る。

直ぐに初春は電話に出るのを見た一光は、そこでやっと彼女の右二の腕に付けられている腕章に気付く。

「なっ！！（まさか今回のターゲットはこいつか！？）」

直後、初春の背後から一光がセブンスミストまで連れてきて、当麻が店内を案内した少女がカエルの様なぬいぐるみを持って走ってきた。

「おねーちゃーん。メガネかけたおにーちゃんがおねーちゃんにわたしてって」

少女に声を掛けられた初春は、少女の方へと振り返る。

少女の姿を見た上条はホッと胸を撫で下ろすが、御坂の顔はなぜか浮かない表情だった。

すると刹那、少女の持っていたぬいぐるみに異変が起きる。

ぬいぐるみの中心部に黒い球状の歪みが生じ、少しずつぬいぐるみを飲み込んでいった。

「ッ！！？」

それに気付いた初春は、瞬時に少女を庇うように抱きかかえると、その場にしゃがみ込む。

「逃げてください！！　あれが爆弾です！！！」

ぬいぐるみはどんどん球状の歪みへと飲み込まれ、段々と歪な形になっていく。

「（レールガンで爆弾ごと吹き飛ばすッ！！）」

「（くそ、俺の距離からじゃ間に合わない！！）」

御坂はそれを見て、レールガンを放とうとポケットからコインを取り出そうとする。

だが、そこで御坂はコインを取りこぼし、床へ落としてしまう。

「（マズった！！）」

そして一光は、距離が意外と離れていた為に、無事に助けるのが困難だと理解する。

「（クソ！　どうすれば！！）」

そんな2人の事をあざ笑うかのように、球状の歪みは吸収する速度を急激に上げると、一気に収束する。

「（間に合わ――――――）」

そして・・・・その場のすべてを爆発が飲み込んでいった。

次回――虚空爆破事件（グラビトン）・偽解決

第１０話：虚空爆破（グラビトン）事件・偽解決

「犯人、捕まったってな」

「みたいだな」

あの爆発に巻き込まれそうになってから、一晩が過ぎた。

あの後、一光は爆発から逃れることができ、風紀委員（ジャッジメント）や警備員（アンチスキル）に見つかる前に現場を去った為、犯人が捕まったと知ったのは朝のニュースサイトの記事でだった。

そして現在、意識が回復し、怪我もほとんど完治しかけている廻に詳細を聞いているところだ。

「どうやら犯人のレベルは書庫（バンク）では異能力者（レベル2）らしい」

「異能力者(レベル2)ぅ！？　どう見てもあれは大能力者(レベル4)はあるって！」

「だよなぁ・・・・だから今回、犯人を特定できなかったわけだよな」

廻はベッドに上体だけ起こし、デッド備え付けのテーブルで今回の事件の報告書のコピーを確認しながら呟く。

「・・・・それにしても、お前回復早いよな。本当なら後1ヶ月程は入院しないといけないのに」

「まぁ、俺の能力様様だな」

そう言いながら、廻は自身の指先に黄色い炎を灯す。

「虹色炎舞(セブンブレイズ)の黄炎か。細胞を活性化し、自然治癒力を高める炎」

「気が付いてからずっと使ってたからな。けど、ずっと演算しっぱなしは疲れるわ」

「そうか・・・ま、今はゆっくり休んでおけよ」

「・・・・・だな」

2人はどちらからともなく笑う。

その時、病室のドアが開き、誰かが入ってくる。

「あ、春夏秋冬（ひととせ）先輩。お見舞い――――」

入ってきた少女は、部屋の中に居る一光の姿を見た瞬間、持っていたお見舞いの品と思わしきフルーツ盛り合わせを床に落とし、固まる。

その音を聞き、初めて少女の存在に気付いた一光は少女の顔を見て同様に固まった。

「「ど・・・どうしてお前（あなた）がここに！？」」

そこには、事件の現場でも出くわした少女――初春飾利が立った状態で固まっていた。

「初春、どうしたんですの？」

「初春さん？」

「ちょっと、早く入ってよ初春！」

さらに初春の背後から、3人分の少女の声が聞こえてくる。

一光はその内の2つの声を聴き、ヤバいという表情になった。
そんな一光の気持ちも知らない彼女たちは、次々に病室へ入ってくる。

「あぁ！　あなたは振屋一光！！」
「何であんたがここにいんのよ？」
「え？　誰ですか？」

病室に入ってきた少女達――白井黒子、御坂美琴、そして黒髪長髪の少女――佐天涙子は三者三様の反応をする。

「ふはは・・・・面倒だ」

この状況をどうするか考えるだけで面倒臭くなり、溜息を吐く一光だった。

「まさか、こいつが春夏秋冬先輩と知り合いだったなんて」

「知りませんでしたわ」

あの後、佐天には自己紹介を、他の３人には何故一光がここに居るのかを、説明した。

「しっかし、白井と初春だけなら分かるが、御坂と佐天も来るとは思わなかった」

「いや、まぁいつもお世話になってるしね」

「そうですよ！」

「そう言いながら果物に手を伸ばさないでください、佐天さん」

フルーツに伸ばしていた手をパシッと叩かれる佐天。

「うぅ、酷いなぁ初春」

叩かれた手を擦りながら、ゆっくりと初春の後ろへと回り込むと、スカートを――――――

「それでは皆さんお待ちかねの――――――」

「――――――お前は何しようとしてんだ」

――――――捲ろうとしたが、その前に一光に頭を叩かれ阻止される。

「アイタッ！　うぅ・・・初対面の人に阻止されるとは」

「全く、何やってんだか」

「えぇ～、良いじゃないですか。合法的にスカートの中が見れるんですよ？」

「合法的じゃありません！！」

ぶーたれる佐天に怒鳴る初春。

そんな2人を見て、一光は苦笑を浮かべた。

「それにしても良かったわね。これで事件も解決したし」

「ですわね」

「そう言えば、犯人の様子はどうだ？」

廻の言葉に、白井は端末のモニターを開き、調書を確認する。

「えぇっと・・・今のところは素直に犯行を認めていますわ」

「そうか。なら安心だな」

「事件も終わったんだ。今は少しでも身体を休めてろ、四季」

一光に四季と言われ、廻はいやだからとその呼び名を否定しようとする。

そのやり取りを聞き、４人は疑問符を浮かべる。

それに気付いた廻が、不本意ながら一言だけ告げる。

「いや、俺の苗字で気付けよ」

その言葉を聞き、４人はあぁ！と納得した。

「あ、そろそろ面会時間終了するな」

一光が自身のケータイを確認しながら呟く。

「あ、ホントだ」

「それでは、わたくし達も帰りましょうか」

「そうですね」

「それじゃあ失礼しました！」

4人は2人に別れを告げると、病室から出て行った。

「んじゃ、俺も帰るか。ちゃんと身体休めろよ？」

「分かってるって。何度も言わなくていいっての」

「ふはは、そうかい。それじゃな！」

一光も、廻に休むよう言ってから病室を後にする。

これで、虚空爆破（グラビトン）事件は幕を閉じた。

そう、幕を閉じたかに見えた、が・・・・・・・

「くそ！　くそがぁ！！」

学園都市にあるとある路地裏。

そこで、1人の青年が壁に拳を打ち付けていた。

「くそっ！！　介旅が失敗した時に後始末として消してたのに、あいつが居なくなったら俺の犯行がカモフラージュ出来ねぇじゃねぇか！！」

そんな青年の背後から、数人のスキルアウトが襲い掛かってくる。

青年はポケットから1円玉を数枚取り出すと、スキルアウト目掛けて放る。

刹那、1円玉が一気に爆発し、スキルアウト達を吹っ飛ばす。

「・・・・仕方ねぇか。ここからは、俺が続けてやるよ・・・・風紀委員狩りをなぁ！！！」

青年は誰にでもなく宣言すると、その場から去っていく。

次回――虚空爆破事件（グラビトン）・終わらぬ爆発

第１１話：虚空爆破（グラビトン）事件・終わらぬ爆発

虚空爆破（グラビトン）事件の容疑者の少年が捕まってから、６日が過ぎた。

風紀委員（ジャッジメント）第一七七支部では、虚空爆破（グラビトン）事件の後処理（報告書整理や調書の確認など）を行っており、まだ多少の忙しさがある。

支部内のＰＣ２台は初春と白井の２人がデータ化した書類の確認と整理を行っており、テーブルでは廻が調書を並べて内容の確認をしている。

そして、ここにいるとおかしい人物が１人、廻の手伝いをしていた。

「おい四季、どうして俺は手伝わされてんだよ？」

部屋の端で文句を漏らしながら書類の整理をしている一光が、廻に問う。

「どうせ暇だろ？」

「いや、まぁ暇だがなぁ・・・・」

じゃあ手伝えと言い、自身の作業に戻る廻。

それを見て、溜息を吐きながら諦めて元の作業を続ける一光。

現在、一光は廻に支部へと連れてこられ（強制的に）書類整理を手伝わされていた。

最初は逃げようとしていた一光だが、その度に廻の能力で阻止されてしまった為、もう諦めている。

「はぁ・・・・・面倒だ」

「無駄口を叩いてないで、早く書類整理を終わらせてくださいよ」

初春はＰＣで作業を続けながら一光に注意する。

一光ははいはいと半ば投げやりな態度を取りながら作業を黙々と続けていく。

それから暫くが経ち、時計の短針が４時を過ぎ、長身が３０分を指したと同時に、全員の作業が終了した。

「終わったぁ～」

「終わりましたわ・・・」

「終わったぁ！！」

「お・・・終わった・・・・・」

全員が机に突っ伏して身体を休めようとした時、固法が４人の元にやってきて、テーブルの上に何かを置いた。

「みんなお疲れ様。これ、今日買ってきたケーキなんだけど、私は食べたから４人で食べて」

そう言われて視線を向けた先には、皿の上に乗せられた４種類のケーキが美味しそうな匂いを醸していた。

「美味しそうだな」

「ですわね。ですが・・・どれを頂きましょうか？」

皿の上に載っているのは、ショートケーキ、モンブラン、ザッハトルテ、フルーツタルトの４種類。

誰がどれを選ぶかによっては被る可能性がある。

そう――――――――――――

「「俺（私）、ショートケーキがいい（です）！！」」

――――――――――――こんな風に。

人によっては、この状況で言い争ったり、ジャンケンをしてどちらが食べるか決めたり、互いに譲り合ったりするだろう。

だが、この場ではそのようなことが起きなかった。

「・・・・・じゃあやっぱ俺、モンブランでいいや」

一光はショートケーキに伸ばしかけていた手をモンブランへと伸ばし、自身の皿に乗せ手前に持ってくる。

「え？　えっと・・・良いんですか？」

一光がここまで簡単に諦めるとは思っていなかったのか、初春はキョトンとした表情で一光に聞く。

「ふはは、流石に年上だからな。こう言うのは年下に譲れって親に言われてんだよ」

それに妹もいるしなと最後に付け加えると、一光はモンブランのクリをフォークで掬い上げると、一口でパクリと口に入れる。

初春は一光の言葉を聞き、少し考え込む。

が、その後すぐに一光の言葉に甘えてショートケーキを自身の皿に乗せる。

そのやり取りを見て、白井と廻は軽い微笑を浮かべながら、残ったケーキを取り、2人と同様に食べ始める。

直後、部屋の中にピーッ！ピーッ！とまるで警告音のような音が響き渡る。

「ぶっ！　なんですの！？」

「これ、警告音か何かか？」

白井と廻、初春が周囲を見渡す中、一光はこの音の発生源が何なのかに気付く。

「あぁ悪い、俺のノーパソだ」

それと同時に、3人がズコッとズッコケそうになる。

3人は全く・・・や傍迷惑ですわなどと口々に漏らす。

そんな3人の文句を無視して、一光は自身のPCを開き、今のアラームの原因を調べようとする。

だが、その原因はすぐに分かり、同時に信じられないと言う表情になる。

「・・・・なぁ、廻。1つ聞いていいか？」

「あん？　何だ？」

PCの画面に視線を向けたまま、一光が廻に問う。

「この間の虚空爆破（グラビトン）事件の犯人・・・釈放されたとか無いよな？」

「それはねぇって。流石にあんなことまでやってたんだからな」

一光はだよなぁと呟きを漏らしながら、ずっとＰＣ画面を見つめている。

が、暫くすると誤作動か？などと呟きながらＰＣを閉じ、３人が座っているテーブルの所へと戻る。

「何だったんだ？」

「いや、プログラムの誤作動だと思う。もう使うこともないプログラムだったからな」

廻はそっかとだけ言うと、またケーキを食べ始める。

一光は何故あのプログラムが作動したのかと考えながら、モンブランを食べ始める。

そんな彼のＰＣには、こんな表示が出ていた。

●重力子観測プログラム

観測原因：重力子の爆発的加速を確認。

観測箇所：風紀委員（ジャッジメント）第一一三支部内。

場所は変わり、風紀委員（ジャッジメント）第一一三支部。

現在、この場所はとても目を当てられる惨状ではない。

「ぐ・・がぁ・・・・・！！」

室内はどこも黒焦げで、机やドアはどれも拉げていた。

そして部屋の壁付近には、数人の風紀委員（ジャッジメント）が酷いケガをして倒れていた。

その誰もが服は焼け焦げ、肌には大小差はあれど火傷を負っている。

「あ～ぁ・・・・スッゲェスカッとしたぜ！」

そんな中、唯1人だけ無傷な青年が、風紀委員（ジャッジメント）の1人を踏みつけながら不気味な笑みを浮かべる。

「しっかし、ここまで派手にやっちまったらすぐに他の奴らが駆けつけるか。どうすっかなぁ？」

青年が指を顎に当てて考えていると、そこに少女が1人、突然姿を現した。

「ちょいちょいちょいちょい！　あんた何やってんのさ！」
「あぁ？　なんだよ、干城（かずさね）。見て分かるだろ？　爆破だよ」
青年の言葉を聞いた少女は、深い深い溜息を吐きながら青年に詰め寄る。
「あんたねぇ！　私らの目的は確かにこいつらだけど！！　こんなに派手にやっていいわけないでしょ！？」
「気にすんな！　俺は気にしない！」
「殴っていい！？　殴っていいかな、私！！？」
拳を握りながら少女は青年をこれでもかと言うほど睨み付ける。
が、そんな少女のことなど気にせず、青年は踏みつけていた風紀委員（ジャッジメント）を蹴飛ばす。
「さてと、そんじゃあ行こうぜ、干城」
「・・・・はぁ、もういいわ。それじゃ、早くアジトに帰るわよ、干城（かんじょう）」
「それにしても、漢字だけ見ると紛らわしいよな。俺とお前の苗字

って」

「それ今言う事かな？　それに名前の方は読みが同じだから、そっちの方が紛らわしくない？」

「あ～、それもあるよなぁ」

そんな他愛のない話をしながら、青年――干城（かんじょう）　鎮樹（しづき）と少女――干城（さね）　静稀（しずき）はその場から姿を消した。

次回――虚空爆破（グラビトン）事件・少年少女（虐げられる者）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0782z/

とある科学の電磁侵犯（ハッキングパルス）

2011年12月18日02時55分発行